

# 大学の戦後五十年

塩澤 君夫

しおざわ・きみお  
愛知県立大学長

学徒動員で一年戦争にかり出され、敗戦後復員、復学して一九四七年に大学を卒業して助手になった。以来今年で丁度五十年間大学教員をつとめてきたのだが、近年の大学の荒廃した状況をみると、ずっと大学の内部にいたものとして社会に対して申しわけないと責任を痛切に感じている。

戦後五十年の大学をふり返ってみると、一九七〇年前後を境にして、前半は昂揚期、後半は衰退期と、かなりはっきりと区分できるように思う。

敗戦直後からの四、五年は、戦時中の弾圧・禁書、統制から解放されて、学問思想の自由が完全に実現していた時代であった。何を研究してもいい、どんな本を読んでもいいということだが、戦時中を経験した当時の学生や研究者にとっでどんなにすばらしいことであったかは、今の学生諸君には実感できないだろうと思う。当時の学生は、廃墟と食糧難のきびしい現実の中で、明るい未来への展望をさぐっていた。平和・民主主義・学問思想の自由……。若者たちはひもじさの中で底なしの自由を樂しみ、必死に未来への夢を模索した。

その後、経済的には次第に復興したが、大学をとりまく政治情勢はきびしくなった。しかし、学生たちも若い研究者たちも夢は失わなかった。夢があったから、理想を追っていたから、社会への関心は強く問題意識も強烈であり、それが研究水準を高め、学生たちの主張や行動は一つの社会的パワーとして大きな役割を果たした。六〇年安保や学園紛争といわれる時代の学生の昂揚はその延長線上にあった。この刺激と昂揚の中で、教員も学生も強い問題意識をもち、研究と教育も学生運動ももっとも活発におこなわれたのである。

六〇年代末ころは、戦後の大学のもっとも充実した時代であったと思う。あの頃の学生諸君はすばらしかった。社会の矛盾を追求し、それを変革してもっとよい社会をつくらうという若者らしい純粋な夢と理想をもっていた。そしてそのために大学は何をすべきか、学問はいかにあるべきかを鋭く問題提起した。かれらの求めた夢の中身は多様であったので、お互いの中で対立しはげしく議論し、時には若者らしい性急さから過激な行動に出るものもあったが、かれらは連日議論し、行動し、そし

てよく勉強した。私のゼミナールの歴史の中で、あの頃の学問的水準がもつとも高かったように思う。大学運営に対しても、学生たちは民主化と学生参加を要求した。すばらしい問題提起であり、教員になつていてはかれらに教えられ、かれらと共に大学改革に努力し、大学は大きく変わった。例えば、大学運営への学生参加の一例として、多くの大学で学長や学部長の選挙に際して学生の意向投票や拒否投票が定められたのはその頃であった。だが、学生参加のこの権利を今の学生たちは行使しようともしない。意向投票をする学生は極めて少ない。私はこのような学園の現状を決していい状態とは思わない。

あれほど燃え上つた学園紛争が機動隊の導入という大学らしからぬ方法で鎮圧されたあと、日本社会にはスチューデント・パワーが再び現われることはなかった。学生たちは社会の矛盾を変革しようという夢や理想を失つたかにも見える。夢を失つていなくても、それを行動で表わすことへの無力感と空しさを知つたかの如くである。高度成長で経済的に豊かになり、日本社会は成熟し安定して、容易に変革などできないというような歴史的感覚が学生たちを支配するようになった。世の中そう簡易に変わらないと思つたら、青くさい夢など捨てて、この安定した社会秩序の中で陽の当たる場所に入りこもうという個人的、現実的な利害ばかりを追う学生が多くなつた。社会の矛盾を変革しようとする視点も関心も稀薄になつた。理想と夢を失つた学生は無気力となり、不勉強となり、大学は荒廃した。学生の

このような状況が七〇年代以降続いており、現在もそうである。研究面についても同じことがいえる。最近の学界は沈滞し憂慮すべき状況にある。目標を失つた若い研究者には問題意識も研究視点もない。研究者の数は激増しているのに、毎年発表される論文の数はおびただしい数にのぼっている。にもかかわらず学界は沈滞している。研究者の専門化、細分化がすすみ、研究テーマを小さくしほりこんでいるので、発表される論文も小型のものばかりである。基礎理論からじっくりと研究をつみ重ね、新たな視点から自ら新しい体系を構築して、これまで学界を支配してきた体系と対決し、学界動向を大きく変えていくような大型の研究成果がもう二十年以上も現われてこない。これは学問の進歩は停滞しているといわざるをえない。

このように大学の戦後五十年をふり返ってみると、学生運動の昂揚した時ほど学生の学問的水準が高く、研究者たちの政治的社会的関心が強かつた時期ほど学界の学問的水準が高かつたといえるように思う。いい社会をつくらうという社会的・政治的な変革の夢と目標こそ、学生と学問に対する活力の源だったのであり、研究視点も問題意識もそこから生れたように思う。その意味で、現在の大学は荒廃しているといわざるをえない。大学における学問と教育を根本から立て直すために、どこからどのように改善したらいいのか真剣に議論し行動していかなければなるまい。二一世紀にむけて、日本の大学がもう一度活力をとりもどしてほしいと切に願つてやまない。